

北海道を離れ、北海道を想う

筑波大学大学院システム情報工学研究科 准教授 谷口 綾子

34年前、小学校6年生の日本史の授業で、北海道関連の記述はほとんど記憶に無い。日本史に、自分の生まれ育った地域の記述が皆無であることにすら当時は気づかず、平家物語や太平記に夢中だった。高校生のとき、北海道開拓をテーマとした手塚治虫の「シュマリ」を読んで衝撃を受けるも、その時代に生きた人々が自分とつながっているという実感は薄かった。自分が北海道生まれであることを本当に自覚したのは、東京に移住した15年前からだったかもしれない。それまで、恥ずかしながら、北海道を深く知りたい!と思ったことがなかったのである。生まれ育ったまちで、それが当たり前だったから。

今回、「ほっかいどう学」というお題をいただいたが、筆者は長く北海道を離れており、教育の専門家でも無く、ダイレクトにこれを論じるのは難しい。困り果てて、なんとかひねり出したのが、ほっかいどう学が地域を学ぶものなら、そのきっかけとして「他地域との比較」という視点も必要かもしれない。「北海道に住むわたしたちの『普通』には理由(わけ)がある」ことを知るのには、「老若男女だれにでもおもしろいほっかいどう学」につながるかもしれない。という無理矢理感ただよう切り口であった。以下、雑談めいて恐縮であるが、札幌に30年、東京に15年住んでいる筆者の想う「北海道」を、東京で驚いたこととの対比を中心に述べることにしたい。

「春が来た!」よろこび

東京で驚いたことのひとつは、みかんが民家の庭木になっている、冬でもサザンカ・椿が咲いている、ことであった。1月に梅、2月に沈^{じんちやうげ}丁花、3月にはユキヤナギやレンギョウ、ミモザと同時に桜が咲く。四季

のある気候が、「もののあはれ」に通じる自然を繊細に感じ取る日本人の感性を育んだと言われる。

北海道では、梅も桜も桃も同時に咲く。チューリップも水仙も同じような時期である。情緒もへったくれない、のであろうか。否、筆者はそうは思わない。北海道の「春が来た!」よろこび、世界が一度に明るくあざやかになる感じは、他地域の人には想像しづらいのではないか。どちらがよい、という話では無く、このような気候風土の違いが北海道と東京の人々のメンタリティの違いにつながっている可能性は否定できない。北海道に住む人は、この貴重な「春が来た!」よろこびを存分に味わって楽しむべきだと思う。

雪あかり

北海道の冬は、白い雪のおかげで、夜もほんやり明るくて美しい。これは、ベルリンに住む弟が「ベルリンも寒いが雪が降らないので単に『暗い冬』だ」と嘆いていたことで気づいたことである。ドイツの華やかなクリスマスマーケットも、もちろんキリストの誕生日を祝う準備なのであろうが、この寒く暗い冬をどう乗り切るか、何かきもちをあげるための生活の知恵なのかもしれない。スウェーデンなどの北欧も同様で、かつ緯度が高く雪が札幌よりも少ないので11月から暗い寒い時期になる。だからこそ、道行く人のために窓辺に星やツリー型の美しいライト(写真)を飾って冬の気分を盛り上げる(?)のだと聞いた。



東京の夜の明るさは、春夏秋冬変わらない。北陸も雪国であるが、道路の雪を地下水で溶かすため、「路面が明るい」状況はそれほどない。「ほんやり明るい冬の夜」は大切にしたい北海道の風土だと思う。

プール学習とスキー学習

統計を取ったわけでは無いが、北海道出身者はかなづち率が高いのでは無いか。筆者も泳げない。息継ぎができない。筆者が小学生の頃、夏のプール学習は2回だけだった。それも寒くて皆くちびるが紫になっていた記憶がある。一方、スキー学習は頻繁にあったし、年2～3回は手稲山(札幌市)のスキー場にバスで行った。東京に育つ息子は、夏の間、体育のほとんどがプール学習である。公立の小中学校でスキー学習は聞いたことが無い。

ちなみに筆者が1年弱滞在したスウェーデンの中学校では、凍結した湖で運悪く水中に落ちてしまった状況を想定し、着衣のまま凍結した湖にあいた穴から抜け出す方法を学習するそうである。希望者には実地訓練も行われているとのこと(希望者の有無は不明)。

言うまでも無いが、気候風土によって、生きるために優先されるべき学習は異なる。オリンピック選手の出身地を見ると、冬季オリンピックの競技者は北海道出身者が多い。幼少期の環境が、一流アスリートへの道に多大な影響を及ぼしている。当たり前のことではあるが、なぜ?と疑問を抱くことが、北海道を深く知ることにつながると思われる。北海道を語るに不可欠な気候条件である「雪」を学ぶには、雪たんけん館のWEBサイト*が本当にすばらしい。

北海道の役割と歴史

初対面の人に札幌出身と伝えると「え、北海道?」とちょっと微妙な反応になることに、東京に来てから気づいた。沖縄の人をドジンと言った警察官がいたそうであるが、同様に北海道を格下だと見る人は少なからずいる。北海道や沖縄にミサイルが落とされても、東京の人はそれほど国を攻撃されたとは思わず、あまり気にしないような気がする。一昔前の天気予報で、

「台風は北海道に抜けました」というコメントは一般的であった。つまり同じ日本人、同胞が住んでいる地域とは思われていないのであろう。この事実は北海道にいたら気づかない。むしろ、北海道が旅行先の人気NO.1であること等、北海道に住んでいることをうらやましく思われていると勘違いしている可能性すらある。人気旅行先なのは、日本人にとって北海道旅行が「日本と外国の境界」に行くちょっとした「冒険」だからであろう。日本は島国なのだから、外国との境界は全ての海岸線であると言って過言では無いのに、なぜか——。本稿では触れないが歴史的経緯で理由がわかる。歴史を学ぶ必要がある。

北海道が日本の国に果たすべき役割を考えると、かつて日本の国にとって北海道がどのような位置づけにあったのか、それがどのように変遷してきたか、その「物語」をつむぐこと、語ること、聴くことが不可欠である。それは聞き心地のよい物語ばかりではないかもしれないが、避けては通れないことであろう。

身の回りの事象に無頓着であった筆者は、北海道にいと普通のこと、実は普通では無いことを東京に来て初めて知った。北海道のよさ、北海道の物語を多くの道産子は知らない。北海道の今の状況、日常の生活は所与では無い。先人が勝ち取ってきた権利かもしれないし、先人の知恵と工夫の成果であるかもしれない。あるいは、先人の短視眼的な、軽率な選択の帰結かもしれない。——北海道を知ること、地域を知るとは、自分のルーツを知ることでもあり、自分の将来を考え、地域や北海道の未来を語る礎となる。「ほっかいどう学」がどのように学ばれ、どのような人を育てるのか、楽しみであると同時に、自分もそれに深く関わっていきたく願う。

*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。
<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat000000ozs0.html>

* 北海道雪たんけん館WEBサイト：
<http://yukipro.sap.hokkyodai.ac.jp/>

※ ほっかいどう学考第4回は、8月号の予定です。